

ちよつと不思議なAK—
12との日常

なあのも

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ちよつと不思議な感じのするAK—12との日常ものです。

緩いキャラ崩壊注意です。

気分次第更新です。

目次

雨の日、街中のカフェの前で	—	1
私の興味を牽くあなた	—	9
ふえいとふるみーていんぐ？	—	15
お酒に酔ったAK—12が口付けを迫る	—	27
だけの話	—	40
【最終話】AK—12との朝	—	40

雨の日、街中のカフェの前で

街にあるカフェから出た指揮官は辟易としていた。

「……はあ」

それもそのはず、カフェのドアから出ればそこは激しい雨粒が天から降り注ぐ世界。そう、指揮官は雨によって足止めをされていた。

街に赴いたのは、個人からの依頼の打ち合わせの為だ。本来なら交渉役がすべき事なのではあるが、生憎交渉役は大企業相手に仕事を取りに行っていることと、依頼人がお得意様であったので指揮官が直接出向いて、依頼人とのいつもの待ち合わせ場所である街中のカフェへと伺った訳だ。

依頼は単純な護衛の依頼。今居る地区から依頼人の親族がいる地区へと行くために数日間護衛をお願いしたいというものだ。

同じような依頼だからと言って、もちろん手を抜くわけには行かない。条件や状況というものは日に日に変化していくもの。だから、同じような依頼にもその都度指揮官は打ち合わせを行い、対応しているわけだ。

本来ならそこまでする必要はないし、適当な指揮官なら『いつものですね』と簡単に

済ませてしまうのだが、この指揮官はそういつた丁寧な対応をするのが特徴。効率は確かに悪いが、誠実な対応が顧客からよい評価を貰っているのは想像に難くないだろう。

カフェで打ち合わせを終えて、お得意様は先に離席し、一人カフェに残って依頼内容を纏められるところまで纏めていた指揮官であったが、丁寧に対応していた結果が、目の前の雨で閉ざされた白掛かった景色というわけだ。

「はあ……」

黒い雨雲に覆われた空、勢いは衰えず増していく雨。

次は別の場所で仕事がある。同じように護衛の打ち合わせではあるが、別の地区にまでタクシーなどで移動する必要がある。時間は少々余裕があるが、雨の中であることを考えると天気による交通状況の変動で余裕が無くなると考えた方がいいだろう。

ならば、まずまずここで足止めを食らうわけには行かない。早くタクシーを捕まえられる場所まで移動すべきである。そうは思っても、一步踏み出せばそこは雨。びしょ濡れでやってきた指揮官を見て、クライアントは何を思うことだろうか。

「はあ……全く凄いなあ……」

もう一度息をつき、クライアントに謝罪の電話を入れようかと端末を取り出すためにポケットに手を入れたところで、

「ええ、土砂降りね」

指揮官の隣から、誰も居なかった筈の指揮官の横から、指揮官以外の声が彼のつぶやきに同意した。

「ウオツ!?!」

驚きのあまり軽く背を反らせた指揮官は、反射的に隣に目を見やる。

「ここにちは指揮官」

そこには、朝日を浴びて融け始めた雪の様に真つ白な髪を後部で束ね、瞳を閉じて柔和な笑みを浮かべている顔見知り——否、彼の部下である戦術人形、AK—12がいたのだ。

「な、なんでここに居るんだ?!」

指揮官が驚くのも無理は無い。彼女のことを指揮官は護衛として連れてきては居ない。つまり、彼女がここどころか、この街にいる理由すら無いのだ。

「別に。散歩してたらここについただけよ」

何の事も内容に、本当にたまたま出会ったと言うように首をかしげるAK—12。

「どう考えても散歩の距離じゃ無いぞ……」

そんな彼女の返事に思わず顔を引きつらせる指揮官。街から基地までは車で移動することが必要不可欠な距離だ。戦術人形がいくら持久力に優れているからと言っても、散歩なんて言い訳が通じる筈が無い。

「冗談。細かいことは気にしたら駄目よ。無駄なことだから」

が、彼女自身、自分の言い訳が通じない事くらいわかっている。だから、それを彼女らしく無駄なことを切り捨てにかかってくる。

指揮官からすれば、AK—12がどうやって基地から出たのか、どうやってここに来たのかを知る必要があるので、全くもって細かいことでも無駄なことでも無いのだが、それを言ったところで、煙に巻かれることくらいよくわかっていた。

やるが増えたと言わんばかりに、項垂れて息をつく指揮官と、そんな彼の様子を楽しむようにふふん♪と鼻を鳴らすAK—12。

項垂れた指揮官で会ったが、彼女の手に傘の柄が握られてるのが目についた。

「って傘を二本持つてるのか!？」

それも二本。本当に散歩の為だったら二本も傘を持っていく必要は無い。そうなるともう一本は——

「もしかして——」

まさに渡りに船、救いの女神、そう言わんばかりに傘に熱い視線を注ぐ指揮官。

そんな指揮官の期待に応えるように、AK—12は口角を持ち上げると。

「ええ」

二本の傘をそれぞれの手に持ち、玉留めを親指で押してバサツと音を立てて傘を開く

と、彼女だけ雨の世界へと傘を伴って足を踏み入れ――

「私が二本使うためよ」

相も変わらず穏やかな笑みで言つてのけた。

「じゃあ、さようなら指揮官」

きびすを返し、そのまま彼女は言つていた『散歩』に戻ろうとする。

啞然にとられていた指揮官だが、彼女が背を向けて一步踏み出そうとしたところで我に返つた。

「いやいくらなんでもそれは酷いだろ待つて欲しい!!!」

思わず大きな声をあげてAK―12を引き留める指揮官。彼女は小首をかしげて、何か不満か?というかのように指揮官を見つめている。

「それに、二本差してるから隙間から雨がこぼれて濡れてるし!」

そう、彼女は傘を二本使っているせいで中途半端に隙間が出来ている事と、二本同時に使っている関係で傘を傾けているので傘の先が彼女の肩を濡らしていた。

彼の指摘で濡れている事に気づいたのか、それとも知らんぷりしていたのか、彼女は困つたように唸る。

「うーん……。それは困つたわね」

彼女はその場で180度ターンをすると指揮官に再び向き直り、持っていた傘を一本

手渡した。

「仕方ないから、この傘はあなたにあげるわ」

「よかった……ありがとう……」

傘さえあれば、びしょ濡れにならずにすむ。なんだかんだで傘を渡してくれたAK—12に感謝しながら指揮官は傘を受け取る。

「つて、これ私の私用の傘なんだが!？」

が、指揮官はその傘がグリフィンから支給されたものではなく、自分が私用に使っているものであると気づく。私用の傘は指揮官の部屋にしかない。つまり、この傘を手に入れる為には、彼の部屋に入る必要があるわけで。

「そんなこと気にするべき事ではないわ」

が、窃盗の疑惑がかかった犯人は、はたまた気にするべき事では無いと切り捨てにかかってくる。

その逃げ切り体制に入られたら勝ち目は無いので、指揮官はこれ以上の追求は諦めることにした。

そんな事を言いながらも、AK—12は自分の傘を閉じている事に気がついた指揮官。

「いやその……なんで傘を閉じてるんだ?」

「……」

AK—12は彼の言葉を無視しながら傘を畳むと、指揮官に抱きついた。

「二本差してたら濡れちゃうんでしょ？ だったら一個は無駄よね。それに指揮官の傘の方が大きいから問題ないでしょ？」

確かに指揮官の傘は成人男性用のものなので比較的大きくAK—12が入る分には問題ない。

もしかして、これをやるためにこんな面倒くさい小芝居を？

そう考えるとあきれれる気持ちが出てくるが、心の奥底で考えが読めないAK—12と
言う人形のことがちよつとわかったようで、彼女の事がなんだからかわいらしくも思えてきた。

指揮官は彼女の肩を抱き寄せて、自分にさらに密着させる。

「はあ……。ほら、もつと寄ってくれ。濡れるぞ」

指揮官から抱き寄せられたおかげか、それとも自分のことを気遣ってくれた喜びか、
AK—12は新雪のような頬を微かに朱に色づかせて、一際強い力で彼に抱きつく。

「ふいっふいっ」

そのまま二人は、離れないように、濡れないようにして雨の世界に踏み出す。AK—
12を濡らさないように抱き寄せる指揮官と、指揮官に密着してどこか満足げなAK—

1
2
のシルエットは豪雨の中に消えていった。

私の興味を牽くあなた

中々長時間の休憩が取れなかったことと仕事の疲れがたまつたせいか、何時の間にかソファに背中を預けて書類仕事に励んでいた指揮官は眠ってしまった。

彼の瞼に写るのは真つ白な闇。執務室の蛍光灯を微かに透過した光の白。白い闇の世界のゆりかごに招待されて、指揮官は浅い眠りに入っていたのだ。

眠りの深度からか、指揮官はすぐに違和感に気がつき意識を自動的に浮上させた。指揮官の意識を表に上げさせた要因は、彼の顔がツルツルとしたものに触れられているちよつとばかりくすぐつたい感触。

その感触が何かを確かめたくて、指揮官はうつすらと目を開ける。

彼の夜色の瞳に映つたのは、電灯の光を浴びて月のような輝きを放つ銀糸と、特徴的な瞳を瞼によつて隠した端正な顔。

あまりにも特徴的な出で立ち。たとえ数ミリしか開かれてない視野の中でも、自分と対面している相手が誰なのか指揮官にはよくわかる。その相手とは、AK-12。電子戦に特化した戦術人形の中でもトップクラスの処理能力を持つ超高性能機体。

そんな彼女が、指揮官の顔の輪郭を確かめるように手で触れている。彼女の手は特徴

的なグローブで覆われているので、ツルツルとした感触は彼女のグローブによるものであったのだろう。

指揮官は再び目を閉じて寝たふりへと移り、ここはAK―12の好きなようにさせてあげることに関心がある。

普段は無駄を好まず、必要なことを最適解で進めるAK―12が人の顔を撫でるといふ珍しいことをしているのだ。なんでこんなことをしてくるのかはわからないし想像が出来ないが、彼女が任務以外のことに興味を持つのは珍しい。彼女の探究心を潰さない為に、今は静観することに決めたのだ。

AK―12は指揮官のほっぺたをつまんだり、指先でカリカリと引つ掻いてみたり、瞼に触れては指で押し下ろしてくる。鼻先を指でつまんだり、下唇を持ち上げてみたり。顔を弄つてる間に、何か面白い変顔になってしまったのだろう、AK―12はクスクスと笑い声を漏らしたりもしていた。

彼女のグローブの手触りと、くすぐるような感触に思わず声を出しそうになってしまったが今は我慢。

今のAK―12は指揮官が普段は拝めないようなかわいらしい表情を浮かべているだろう。その表情を見たくなくなってしまいが、指揮官は今はこちらのように自分の好奇心を噛み潰す。

どこかミステリアスな雰囲気があるAK—12とはいえ、起きてる指揮官にはさすがに触れて来ようとはしないだおる。むしろこのタイミングで起きたりなぞしたら、開眼して口外しないように脅される危険性もあるし、本当に口外しないかあらゆる機器を乗っ取って、AK—12による監視生活をしてくる危険性もある。

……実は既に指揮官の私生活は、AK—12の監視下にあることを彼はまだ知らない。知らないが、言ってもいいことは無いだろうから内緒にしてあげた方が彼とAK—12のためになるだろう。

散々顔に触れたことでさすがに触るのにも飽きたようで、AK—12は指揮官の顔を弄っていた手を段々下へと持って行く。

胸元を白魚のような細い指先でくすぐり、鳩尾をなぞって指揮官の危機感を煽ってみせ、鍛え上げられて筋肉が浮かぶ腹部をなぞり、へそのある部分に一度指を沈めると感触を確かめるようにグルリと動かし、そのままさらに下へ——指揮官の股関節へと手をかけようとしたところで——

「ストップ!!」

さすがにこれ以上先に触れるのは許してはいけなないと、指揮官は寝た振りを止め、大きく目を見開き、言葉でAK—12を制止させる。

「おはよう指揮官。やっと寝たふりを止めたのね」

指揮官が寝たふりをしていたのはバレてしまったらしい。彼女が時折クスクスと声を漏らしていたのは、もしかして指揮官が寝たふりをしているのはとづくにわかつていて、寝たふりを続けることを可笑しく思つて笑つていた可能性がある。

そんな指揮官の考えを読み切つたとしても言うように、AK—12は口角を持ち上げて余裕のある微笑みを湛えている。

AK—12は笑んだまま、再び指揮官の股間に指を這わそうとして——
「だからやめい！」

指揮官はその手を掴んで無理矢理止めさせた。

AK—12は悪びれる様子も無く、なんで？と言わんばかりに首を傾げる。

「(こ)うい(こ)とはだなあ?！」

そんな彼女に声を荒げて、いくら興味があることを徹底的に追及したくなつたからと言つてやっていいことと悪いことがある、と説教をしようと指揮官。

だが、彼が説教モードに入る前に、AK—12が言葉を重ねて遮る。

「指揮官、私はあなたのことをもつと知りたいわ」

「だからと言つてもなあ!？」

「知りたいのよあなたのこと。あなたの過去を知るだけじゃ駄目、あなたの今を知るだけじゃ駄目。もつともつと知りたいの」

AK—12の纏う雰囲気が変わる。その証拠に彼女の微笑みの種類が変わっている。彼女の浮かべていた温和な微笑みが、飢えた獣が獲物を見つけた時のような欲望に満ちた微笑みに。

その雰囲気にも飲まれてAK—12の手を掴んでいた指揮官の強さが弱まってしまふ。AK—12は力が抜けた指揮官の手を、今度は自分の番だと言うかのように自分が掴むと自分の胸元へと持つて行く。

指揮官の大きくゴツゴツとした男性らしい手が、AK—12の着るジャケット越しでもわかるくらい豊かな胸へと導かれ、ふわふわな感触に包まれて沈んでいく。

その柔らかさには何処か安心感のようなものを感じるのと同時に、恐怖故に敏感になった感覚が沸き立ち、様々な方向へと指揮官の感情が舵をとる。彼女の雰囲気へ抱く恐れ、彼女の胸部へと触れた安心感、そして場違いにも男としての性の悦び。

AK—12が指揮官の股間を撫でる。その刺激に指揮官の背筋は大きく震える。
「あぐ……い……」

指揮官の表情が蕩けるように歪む。普段は穏やかな彼が浮かべた特殊な有様に、AK—12は恍惚を含んだ吐息を漏す。

——ああ、どうしてあなたはこんなにも。私を惹き付けてやまないのだろう。

AK—12は瞳を開いてカーネーションのような色をした特徴的な瞳を露わにし、

ターゲットを視界いっぱいに捉えて、妖艶な微笑みを浮かべる。

——限界なのはあなたじゃ無い。この興味を、あなたへの好意という好奇心を抑えられないのは

「だから、私が見たことの無いあなたのことを、いっぱい見せて？」

——私だ

AK—12は指揮官の股関節を人差し指と中指で撫でて挑発した後に、チャックを一瞬で下ろす。

彼が艶かしい吐息を漏らすと同時に、AK—12も呼応するように熱のこもった吐息を彼へと吹きかける。

今、自分と彼は同じ気持ちで一つになつてゐるのだ。そんな倒錯した思考にAK—12が身をまかせる。

欲望は、もう、抑えきれない。

AK—12は指揮官の肩を押してソファに沈みこませ、自分の獲物だとマーキングするように、強引に、熱情的に、扇情的に、彼の唇を食った。

ふえいとふるみーていんぐ？

近頃、とあるグリフィンの基地では占いが流行っているようだ。

しかも、人間たちの間ではなく、戦術人形達の間で。

どこまでも現実的な予測しか出来ない戦術人形達が、占いという不確定要素を気にするなんて何とも滑稽だと思われるかもしれないが、彼女達にも擬似とはいえ感情が存在する。

人間のように不確定要素に明るい未来を見出し、それに期待値を置いてみることは決して悪いことでは無いだろう。

話を戻そう。とにかく戦術人形達の間では占いが流行っているのだ。花占いや星座占い、数秘術やタロット、風水に四柱推命、と言った西洋から東洋までの手広い占いが戦術人形達の間で行われている。毎日色んな戦術人形が、自分を占って欲しいとK5が引つ張りだこになっているくらいには流行している。

そしてその波は、指揮官ーではなく、彼の秘書官である白雪色の髪を一纏めにした戦術人形、AKー12にも来ている。

訓練所にいる係に戦術人形の特殊技能を最適化のスケジュールを手渡し、執務室へ

と戻る中、ずっと雑誌に齧りついている位にはご執心な様子。何故、彼女が占いにハマっているかと判断したのか。それは興味があることにしか本当に関心を示さない彼女が、『星座……』、『風水……』と度々口にしていたからだ。

訓練所の人員からスケジュールミスを指摘され、当初のスケジュールを達成するために快速チケットを使つていいかと電話で聞かれ、疲れたように息を吐きながら承認する指揮官。電話を切りながら傍のAK-12を盗み見る。

本を読みながら歩くことはあまり褒められた行為ではないが、AK-12が珍しく興味を広げようとしている事と、彼女を怒らせたらグリフィンの基地にある機械を全て掌握しようとして、ボイコットを超えた何かを仕掛けてくるので、あまり逆らわないようにしている。どちらかというところ、指揮官的には前者の意味合いが強いのだが。

AK-12は余程面白い占いを見つけたようで、「ふーん」、「なるほど」と唸り声をあげている。そんな姿を目にすれば、興味があることを発見していいことだ、と微笑ましく思えるかもしれないが、彼女の行動に度々振り回されてきた指揮官としては、背筋を冷や汗が伝うような緊張状態だ。

良くも悪くもAK-12は興味を持ったことをすぐさまやりたがる節があるのと、普段から瞳を瞼で塞いでるのもあつてか、全く持つて考えが読めないのだ。

つまり、何が言いたいのかというと、嫌な予感がしている。

「ねえ、指揮官」

「なんだ？」

うんうんと頷くような仕草と、納得したように唸るのをやめて、隣で歩く指揮官に声をかけるAK-12。それに対して指揮官は視線を合わせずにリアクションを返す。

「運命の相手が近くにいますよ」

「ほーん」

運命の相手。この基地には指揮官以外にも人間がいる。カリーナや上級代行官であるヘリアン、それに整備士などがそうだ。

つまり、自分という可能性はまだまだ低い。

そうやって自分に言い聞かせる指揮官だが、散々AK-12に振り回されてるだけあって、この後の展開が何となく予想できてしまうのが悲しいところか。

「私の半径1メートル以内にいる男性、だそうよ」

AK-12と指揮官は横並びで歩いている。手を大きく伸ばさずとも手を繋げそうな距離感で。

その言葉を聞いた瞬間、指揮官は条件反射で一步大きく後退した。人間の太股で歩ける一步は一番多くて自分の身長くらいとの言い伝えがある。少なくとも指揮官の身長は1メートルは超えている。だから、AK-12の言った判定には引つかからない。そ

うやうやして額に浮かぶ汗を袖で拭った所で――AK―12が一步大きく後ろに下がってきた。

これでは、1メートル以内に入ってしまう！

「成る程、そうか」

その瞬間、指揮官は立ち幅跳びの要領で腕を振って跳躍。再びAK―12から距離を取ることに成功する。

「運命って案外近くにあるもの、だって」

指揮官が距離をとった事に反応したAK―12も正規軍製特有のハイエンドな演算機能を使い、すぐさま対策を取る。つまり、AK―12も軽く飛び、再び指揮官に迫る。

「成る程、よく周りを見渡してみるものだ、な！」

しかし、そんなことが予測が出来てない指揮官では無い。指揮官は着地の勢いをすぐ様殺し、バックステップを踏んで距離を取り、AK―12とのすれ違いを演出する。

人間の柔軟な思考には驚かされるばかりだ。そんなことを演算装置の片隅で思いながら、AK―12は踵を返し、指揮官と相対する。

指揮官としては、絶対に捕まえられたく無い。捕まえた後に何をされるのか、予想が付かなすぎて怖いからだ。あの手この手で弱みを握られるのか、それとも強引に何か

を迫られるのか、或いはA K—12の興味あることに永遠と付き合われるのか。どれを考えても、それ以上のことをしそうなA K—12という戦術人形が怖くて仕方ない。

「はいっ」

A K—12は怪しく微笑む。指揮官の考えなどお見通しと言うかのように、或いは指揮官を捕まえた後のことを予測し始めてるかのように。

「ははっ……」

A K—12の次の手を予測しつつ、何とかスプリングフィールドの居るカフェに逃げ込もう。大正義スプリングフィールドなら何とかしてくれる。そう考えつき、逃走経路を練る指揮官。

A K—12は薄っすらとマゼンタの瞳を覗かせながら、手に持っていた雑誌を脇に投げ捨てる。もう用済みかと言うかのように。

悲しき人間の本能なのだろうか、指揮官の視線が投げ捨てられた雑誌に、一瞬だけ目を向けられた。そのくらいで油断する指揮官では無いが、その投げ捨てられた雑誌こそが彼女が仕掛けた一番の罠だった。

パラパラと宙を飛ばたく雑誌、その雑誌が開いたまま地面に着地する。

「……はっっ」

指揮官が素っ頓狂な声をあげるのも無理はない。A K—12が投げ捨てた雑誌。

その開かれたページは真っ白で何の文字も写真もイラストも無かった。開いた時、両面とも白紙のページがある雑誌が存在するだろうか？否、存在しないだろう。

つまり、これは――AK―12は表紙しかない雑誌を熱心に読んだふりをして、さつき言った占い結果はデタラメかと思つたらデタラメ以上の何かで、全てはこの時のために仕組まれたトラップで――

刹那の時が流れた世界。微かに肌で感じる自然じやない空気の流れ。それが指揮官を現実世界に呼び戻し、大きく手を伸ばして自分を組み敷こうとするAK―12の手を自分の掌で受け止めて、応戦する。

「逃がさない!!!」

AK―12の腕力は戦闘モードでないために抑えられているが、それでも成人男性で平均以上の筋力はある指揮官のそれと引かずとも劣らない。

「逃せ!!!」

対する指揮官は応戦しようとしたことが判断ミスであることに気がついた。その理由は簡単、持久力では戦術人形には勝てないからだ。人間がフルに力を発揮できるのはほんの一時。それは疲労や体力の消耗など様々な要因による決まりごと。

対する戦術人形にはスタミナ切れがと言うものが殆ど存在しない。言い方を変えればエネルギー切れがあるが、少なくとも指揮官のような筋力が多少あるだけの人間で

はAK―12のエネルギーが切れる前に力つきることだろう。

「んぐぐぐ!!」

ならば、手を離して逃げてしまえばいい。そう考えてももう遅い。AK―12に手を握り締められて脱出不可能。

「ふふふつ」

ゆっくりじっくりと蜘蛛の糸に絡め取られる指揮官。AK―12は自分から糸に塗れようとする指揮官に余裕の笑みを浮かべる。

押してダメなら引いてみる。その精神で手を引いて、AK―12の力を逃がそうとした瞬間、

「よんごねー!あれなーに?」

廊下に響き渡る、舌足らずな高い声。その声が聞こえた方角に2人は視線をやる。

そこには、子供スキン適用のUMP9と、

「あれはねー!バカツプルのケンカよー!」

腰に手を当てて自慢げに言う子供スキンが適用されたUMP45がそこにはいた。

彼女たちがここに来た理由。それは先程快速訓練を終えた報告に来てくれたのだろう。先程、快速訓練の許可を出してまで訓練させていたのは彼女たちなのである。

しつかりして偉いものだ。

が、そんな風に褒めてやる余裕は指揮官にはない、

「誰がバカツプー」

45の発言を否定しようと口を開いたところで、

「ぬおっ!？」

意識がよそに向いて僅かに力が抜けたのか、その隙を突かれてAK―12の右手に両手を一纏めにするように掴まれてしまった。

「あら、いい子達ね」

AK―12から褒められて、2人は自慢げに鼻を鳴らす。いつも柔和な笑みを浮かべているAK―12であるが、2人に対して浮かべる笑みにはいつもの倍は柔らかなもの。の。

AK―12はストラックスの左ポケットに手を突っ込むと、何かを取り出して2人に放り投げる。

2人は小さく背伸びをして見事にキャッチ。彼女たちの小さな手に収まっていたのは包装された飴玉だ。

「それはご褒美よ。指揮官と私がカップルだと言いつらしてくれればもつとあげるわ」

「おお！」

「ちよつ、オマ」

「ホントに!？」

「本当よ。ほら、早く行きなさい」

「はーいー!」

「おーい止まれー!!!」

指揮官の懇願するような悲鳴に2人は耳を貸すことはしない。そのまま2人は背を向けて駆け出す。また良い子のご褒美を貰うために。

いたずら好きの双子の小悪魔が世に放たれた瞬間である。

「ちよ、待て!!」

腕一本だけの拘束では流石に足りなかったようで、指揮官はAK―12の戒めから見事に抜け出し、2人を止めるために駆け寄ろうとするが、第三者が彼を羽交い締めにする。

「捕まえた!!」

AK―12の声とは別の、普段はあまり抑揚がないのが特徴的なーだけけど今はとても興奮気味な声だ。

咄嗟に振り向いてみる指揮官。そこにはAK―12より明るめの、光の当たり方によつては太陽と同じ淡い金色の髪を持った、AK―12の相棒とも言える戦術人形がそこだ。

「AN—94!？」

そう、指揮官を羽交い締めにしているのはAN—94。普段なら指揮官と同じようにAK—12の興味に振り回される苦勞人仲間。その仲間だと思ってた彼女がなんで指揮官を取り押さえているのか、

「AK—12から通信で聞いたぞ指揮官。AK—12と結ばれるって!」
「違う!」

どうやらAK—12は指揮官と押し合い圧し合いを繰り返して間にAN—94に通信を送ってきたようだ。ただ、その言葉だけで彼女がAK—12の救援に来るとは思えない。その理由は、すぐに彼女の口から語られた。

「それと、私を養子にしてくれるって!」

AN—94の目が欲しかったおもちゃを与えられた子供のようキラキラと輝いている。彼女が自らの存在意義としているのはAK—12を全力でサポートすること。存在意義と言うよりは、彼女の一方的な依存ではあるのだが……。

そんな彼女が、(仮定とは言え)指揮官とAK—12の養子になったらどうなるか？ それこそ、AN—94がどこぞに嫁入り(別オーナーの引き取り?)が無い限りはまず離れることはないだろう。彼女に取って手放しに喜べるような最高の条件。逃すわけにはいかないだろう。

指揮官はギギと首回りの関節が凝り固まったかの如くぎごちなく正面を向き直る。
「うふっ?」

そこには瞼を薄つすらと持ち上げ、妖艶に微笑みながら小首を傾げる、珍しく可愛らしい仕草をするAK—12がそこに居た。

「さあ、私と結ばれる時よ、運命の指揮官!」

「早く私のお義父様になってくれ指揮官! 私も指揮官の娘になれるのなら悪くない!」
自分勝手に願望を押し付ける大事な部下2人に対して指揮官は、

「オ・マ・エ・らあああああ!!!」

基地中に響き渡るような、喉が張り裂けんばかりの怒号をあげるのであった。

因みにこのやり取りの数分後に、いたずら好きの2人の小悪魔の効果が発動し、数多くの戦術人形と女性が集結しようとしたらしい。

そんな敵達から、雑に指揮官を抱えて逃げるAK—12とAN—94の表情は何処と無く楽しそうだったそうなの。

一言だけ言えるとしたら、指揮官の振り回される日々はAK-12を気に入って副官に置いている限りは永遠に続くことだろう。

お酒に酔ったAK—12が口付けを迫るだけの話

ある日の夜の基地。

仕事も終え、睡眠までの時間を自室で過ごし、眠りとしていた指揮官。

ニュース番組が流れる深夜近くの時間帯となり、そろそろ寝るかと思えば腰を上げたところ
で

ガチャン

と音を立てて、指揮官の部屋の電子ロックが外れた。

「はっ？……！！」

第一声は疑問符。開くワケの無いロックが開いたことへの。

だが、指揮官の体はその理由を考える前に、一瞬で硬直した。

その理由は簡単、この時間帯に外部から開くわけの無いロックが開いたからだ。

この時点で、異常事態だ。

この基地のセキュリティを掻い潜ってやってきた侵入者か、それとも鉄血の人形が基地へと近づいていると誰かが報告しに来たのか。

なんにせよ、良い予感も微塵もない。

緩んでいた気を引き締め、ドアへと注目する指揮官。

どんな状況に陥つてもすぐに切り替える。その早さこそ、彼が評価される要素の一つだ。

——果たして鬼が出るか蛇が出るか。

身構え、扉を開けた者を待ち構える指揮官。

扉のドアノブは回され、瞬時に扉が開かれる。

そこからは一瞬の出来事だった。

紫苑の光跡が宙に描かれ、アッシュグレーの風が吹き渡り、指揮官の体を風圧で押し倒したのだ。

いや、彼は風圧こそ感じたが、それが直接的な原因ではなかった。

彼は押し倒された後、物理的な衝撃を肩に感じていた。背面でなく前面に。

それに異様に体が持ち上がらない。

何かに磔にされているみたいに上半身が動かない。

倒れた衝撃と痛みでピントが合ってなかった視界が像を結び始める。

彼の瞳が最初に像を合わせたのは、大きな円に小さな円が隣接したような特徴的な紫苑の瞳。

それだけで、指揮官には相手は誰か判別出来る材料になり得た

「AK—12!？」

指揮官が驚愕混じりに声を張る。

「んふんふん♪」

押し倒した人物AK—12は、機嫌がよさそうに鼻を鳴らす。

指揮官の知るAK—12は、自分の興味でAN—94と指揮官を振り回すような人物ではあるが、こんな夜中に部屋に侵入してくるような分別がつかないことはしてこない筈だった。

その答えは、指揮官の視界の視界がクリアになった瞬間にわかった。

AK—12の顔は真っ赤であった。

「ふんふん♪」

ついでに、鼻歌に紛れて漏れる息もアルコールの鼻に付く匂いを発している。

つまるところ、

「……酔ってるのか?」

「やあ?」

指揮官の質問にはAK—12は疑問形で返す。その時の表情が無駄にいい笑顔なのが、散々振り回すくせに嫌いになれない理由の一つだろう。

「そうか退いてくれ」

「そんなことはどうでもいいの」

そして、自分にとって不利なことはその一言でバツサリと切ってくるのが、この基地のAK—12。

酔っていてもそこは健在らしい

「いや良くないんだが!？」

酔ってることは、まあどうでもいいとして、押し倒されてる状況は流石にどうでも良くない。

そう言い返そうとしたところで、AK—12が指揮官の顔を覗き込み、ジロジロと観察する。

「な、なんだ!？」

普段から得体の知れないAK—12が飲酒によって更に得体の知れないことになっている。

指揮官にとっては恐ろしさしかなかった。

「ねえ指揮官」

「な、なんだ…?」

これから自分はどうなってしまうのか。恐る恐るながらも強気な言葉で言い返す指揮官。

身を縮こまらせ、捕食される寸前のような儂いオーラを醸し出しながら、AK—12に怯え混じりの視線を送る。

AK—12はふふつと声を漏らすと、

「ちゅーしましよ?」

「……はっ?」

指揮官が予想だにできなかった言葉を発信したのであった。

「ちゅ、ちゅー?」

「ちゅーよ」

ちゅーとはまた可愛らしい言い回しだ。AK—12は容姿だけで考えれば凛々さに溢れた戦術人形だ。冷酷なまでの判断能力、高度な演算能力、好奇心に駆られて周（主に指揮官とAN—94）を振り回す傍迷惑な行動力。その全てを合わせて考えても、彼女の口から出てくる口づけを意味する言葉がちゅーだとは思わなかったのだ。

驚きの単語が出てきたこと、唐突すぎる要求に思考停止していた指揮官。だが、AK—12の瞳を閉じた端正な顔が彼の思考能力を再び現実へと戻させる。

「ん〜」

気が抜けたような緩い声を上げながら唇を接近させるAK—12。肩を抑えたまままだと流石にやりづらいうようで、今は床に手をつけている。

つまりは、指揮官への拘束が緩まった訳で。肩への圧迫感が無くなり、自由になった腕を持ち上げて、指揮官はAK—12の顔を両手で包んで侵攻を防ぐ。彼女の酒気に当てられてしまったのか、緊迫した状況であるのに関わらず、『AK—12の頬は柔らかくて手触りがいい』と思いつつながら。

「ふぁにふるほひよのひよ」

何するのよ、と抗議の言葉を挙げたつもりなのだろう。頬を両手で挟んだせいで、唇をわざとらしく突き出したような間抜けな顔付きとなっている。

緊張感の無い、威厳や迫力の無い顔。それでも、薄っすらと目を開き彼女の紫苑の瞳をかすかに覗かせるだけで、指揮官が無意識に唾を飲み込んでしまったのは、彼女の底知れなさを理解しているからだろうか？

間抜けながらも恐ろしさを感じさせる彼女の睨みに屈し、指揮官は頬を引き延ばすようにして彼女の顔を抑えることにした。

「オーケーオーケー。この際、どこで酒飲んだかは聞かんがなんで急にそんな事を言うてきたんだ？」

「興味があるからよ」

「好奇心の化け物め!!」

そのまま再び顔を近づけようとするAK—12と顔を背けつつ引き剥がそうとす

る指揮官。力の強さだけで言えば、戦術人形であるAK—12に部があるが、今は重力の他に力を加えられる要素はない。対して指揮官は下から上へと持ち上げる力を全力で引き出すことが出来る。腕立て伏せでもするようにAK—12は顔を寄せるも、残念ながら今は指揮官に勝てそうにない。

「むむむむ!!」

「んぐぐぐぐ!!」

そのまま数分間、互いに唸りながら工房を繰り広げていたが、ふとAK—12は顔を寄せようとするのをやめたのだ。

「んっ?」

予想外の行動に驚きながらも警戒は解かない指揮官。AK—12のことなのでこの行動はフェイントであると踏んだからだ。しかし、その予想は外れ、

「嫌……なの?」

彼女の口から出てきたのは普段からは想像ができない弱々しい言葉。

「……」

思わず小さく口を開く指揮官。普段からAK—12を傍に控えさせてる彼にとつても、今の彼女の言葉は予想外だったから。

だって普段のAK—12はどこまでも自信に溢れてて、たまに毒舌で、選ばれし者

として確かな実力を持ってそれを奮って、好奇心で自分たちを振り回して——傍迷惑な所はあるけど、傍にいて面白い存在で——

そんな彼女から、そんな弱々しい音声が出るとは思わなかったのだ。

「そう……」

何処か寂しげに眉尻を下げる彼女。声色は相変わらず、弱々しく寂しげなまま。そんな声色となったのは、アルコールのせいなよだろうか？

指揮官へと寄せていた腕を立たせ床から手を離す彼女。

——ああっもう!!

彼女に絆されてしまったのか、指揮官は彼女の頬を包む手の力を強める。まだ、留まれと言わんばかりに。

「なによ?」

珍しく不機嫌なAK—1 2の声。それは、自分の興味を邪魔されたからか、出来なかったからか、指揮官が答えてくれなかったからか。原因を上げればキリがなさそうなのでここで切り上げる。取り敢えず、AK—1 2は指揮官の手に込められた意思が伝わったようだ。

「なあ……」

あのまま放っておけばよかったのに。そうすれば、嵐を無事に乗り越えることがで

きたのに。そう思ってももう遅い。彼は嵐に飛び込むと条件反射で決めてしまったから。

だから、この先のことは決めてない。ここから先も全てが条件反射だ。

「そんなにオレとちゆ、ちゆう、したいのか？」

戸惑うような、少しだけ羞恥を滲ませた声色。

AK—12は品定めでもするかのように薄く瞳を覗かせて、ゆっくりと頷く。

「その……AN—94とかとじゃダメなのか？」

「無理ね」

即答。AK—12を慕うAN—94がこれを聞いたらどんなリアクションをするか、ちよつと興味があるが純粋に哀れみの情も出てきたので、指揮官は心の中で合掌。

「なんで、オレなんだ？」

「こう言うのは、ちゆうしたいって思った時に、すぐに相手として思い浮かべた人とするのがいいって聞いたから」

一体、誰からの入れ知恵なのだろうか。そんなことを言うのは。とは言え、それを詮索している時間は今はない。

「それで、オレか」

「そうよ」

「またもや即答。彼女には元々迷いがなかったのだろう。」

彼女は答えた。なら、今度は指揮官が答える版だろう。

指揮官は、一息を吐く。彼女の好奇心に対する呆れからか、それとも、自分のキモチを整理するためか、それは指揮官にもわからない。

そんな中でも指揮官が何とかわかったのは、彼女と口付けるシーンを想像してみると、小さく口端が持ち上がることに。

「……嫌じゃない」

それしか、わからないから、それだけを彼は口に出すと、彼女の顔を抑えてた手の力を抜き、ダランと床へと垂らし力を抜いた。

「ふふっ……」

AK—12と言う美麗な戦術人形の中でどんな感情が渦巻いたのかはわからない。普段だつてわからないのに飲酒した状態なら尚更だ。でも、彼女が笑っているのはわかる。何処と無く、否、どこまでも楽しそうに。

「無理しないでいいのよ」

自分という存在に自信があるからこそで、普段ならよく出している強者としての言葉ではなく、純粹に彼のことを思つての言葉。

彼女に渦巻く感情はわからないが、彼女の言葉に乗っている感情はわかるのは、長

い間一緒にいるからだろう。

「……いいさ。無理してない」

指揮官は若干拗ねたように目を逸らして、AK—12の推測を否定する。酔っ払っているとは言え、洞察力は鈍ってない彼女がなんだか恨めしくて。

「そう。なら、遠慮はしない」

AK—12は指揮官の頬に手を添える。アルコールの効果は人形にもでるのだろうか？ 普段は冷たく感じる彼女の手は、温水に浸ってたかのような温もりを持っていた。

人間、温かさを感じると安らぎを得てしまう。勝手に細まるような仕草を取る瞳が、勝手な体の動き全てが、彼女の前で晒されてしまうと全てが弱みとなりそうで、少しばかり悔しい。

そんな想いは今はねじ伏せて、細まった視界の中で彼女を待つ。彼女の銀糸が指揮官を覆い隠す。まるで彼のことを外界から隔離し独占するかのよう。

残り8cm、視界は銀色に埋まる。

残り5cm、彼女の長いまつ毛がくつきりとわかる。

残り3cm、指揮官の中にあつた余裕が無くなる。瞳は自然と瞼に押し込まれる。

真つ暗になった世界で。指揮官はただ一つだけ、柔らかな温もりを感じ取った。

◇ ◇ ◇

指揮官が暗闇から解放される。肌を包み込む寒気によって。

ぼんやりと映る視界を指揮官は指で擦って像を合わる。

あの口づけの後、AK—12は電池が切れたように倒れ込んでしまったのだ。彼女が寝息をかいてた事からバッテリー切れでないと判断。単純に緊張の糸が切れてしまっただけだろう。

人形を適当に呼んで彼女を宿舎に送り返しても良かったのだが、夜も遅い事と余計な噂の火種になるのも面倒なので、部屋で寝かしたというわけだ。彼女をベッドに投げたところ、わざとかさうでないのかわからないが、彼女に手を掴まれて離してくれなかったたので、彼女と同じベッドの中で一夜を過ごして今に至るわけだ。

そのことを思い出し、自分の隣を見やる指揮官。そこに、昨日の闖入者の姿がない。夜中に目が覚めて帰ったのかと思ったが、使ってた布団が無いことにも気がつく。

気だるそうに周囲を見やると、寝室の隅に布団お化けが顕現していた。

ぼりぼりと面倒臭そうに頭を掻きながら近づくと、布団お化けは何やら呪詛を唱えている。

「初めてやるのならもつとちゃんとした状況で」

と、何度も何度も。彼女が何か勘違いしているのか、それとも昨日の口づけの記憶

を残しているのかは、指揮官にはわからないし興味はない。

彼に出来ることは、彼女の事を背後から包むように抱きしめ、

「はあ……」

呆れたように、疲れたように溜息を吐き出し、

「めんどくさいヤツ……」

と、何処か楽しむように表情筋を緩めながら一言をだけだったから。

ミステリアスな面のあるAK—12の更にミステリアスな部分。その部分を垣間見せてくれた札をするかのように、指揮官はAK—12を抱きしめる力を一層強めるのであった。

【最終話】AK—12との朝

暗闇に沈んでいた指揮官の意識が浮上する。

横向きに布団に身を預けている彼の瞼が自然と持ち上がり、眼球に光を取り入れ始める。

時刻は朝。指揮官のルーチン通りなら、朝日が出始めた時間帯。何度も迎えた同じ時間の朝。指揮官の体内時計はすっかりと慣され、アラームをセットしなくても決まった時間に正確に起きられるようになったものだ。

彼の視界は真っ白だが、徐々に慣れることで見慣れたワンルームの光景が露わに、露わに………ならない。

霧がかかった頭脳で、何が起きているのかを考える。目の前はずっと白銀。十数秒も経てば、いい加減外界になれても良いはずなのに。

瞼を人差し指で釣り上げる。より多くの光を取り込み、多くの情報を得るために。それでも、目の前は白銀に覆われていて、

「うん……？」

指揮官は小さくうなり声をあげる。

すると、目の前にある白銀が中空を泳ぐように揺れる。カーテンの様に視界を隠していた白銀が宙で解け、今まで隠していた指揮官のローテーブルをチラ見せし、また元の白銀のカーテンに戻る。花の蜜のような甘い香りをまき散らして。

宙に泳ぐ解けた白銀は職人が紡ぐ糸のようで、思わず目を奪われてしまった。

けれど、頭を使うことを止めていなかった指揮官は一つの答えに到達。目の前にある白銀のカーテンは、自分の知らない人工物であると。

少なくとも指揮官の部屋のカーテンは真つ白では無い、太陽の光を遮る黒色。指揮官の部屋にある白いモノは、シャツの類いと食器類と白物家電のみだ。

指揮官は集中するように目を細める。目の前にある白銀のカーテンを睨み付けるように。横向きから仰向けへと体勢を変え、頭の向きを布団と水平から天井と垂直になるように動かす。

視線が完全に天井へと向かう途中で、瞳を閉じみている方も心が穏やかになるような顔立ちの女性。否、戦術人形が彼の顔をのぞき込んでいた。

彼の視界を覆っていた白銀のカーテンは、普段は一纏めにしてある彼女の髪が今は何にも縛られずに流されていることから出来たモノだったのだろう。そう、彼女が興味を突き詰める時みたいにも何にも縛られずに。

「おはよう」

口端を上げ、さも当たり前のように朝の挨拶を贈る彼女。指揮官は、見飽きたと言っても過言ではないくらいに顔を合わせている、優秀な彼の副官。

「……おはようAK—12」

同時に彼にとって大きな悩みの種である存在。それが、目の前にいる正規軍も採用しているハイエンドモデル、水玉パジャマ姿のAK—12であった。

AK—12は小首を傾け、「ふふっ」とどこか楽しそうに声を漏す。

目の前にいるのは、よく見知った顔。問題児ではあるが、彼も認めた存在。指揮官は大きく息を吐き出す。目の前にいたのがAK—12でよかった、と。

布団に肘を突き、上体を持ち上げる。そのまま窓から差し込む光を浴びながら、「ふわあ〜」とだらしなく欠伸を吐き、朝の空気を肺に取り入れる。

布団から出ても肌寒さを感じず、肺に入る空気も身体に馴染むような気温。エアコンのモーター音が耳に入るので、指揮官が寝ている間に暖房を着けてくれたのだろう。寒さが肌に染みこみ、細胞から凍えさせる季節。その心遣いありがたい。

固まった身体の目覚めを促している指揮官にもう一度笑みを向けた後、AK—12はキツチンへと向かう。予め湯を沸かしておいたケトルを手を持って、ティーポッドに注ぐ。茶葉を湯に馴染ませている間に、食器棚から二人分のティーカップを取り出し、

ポットと共にトレイに載せる。

「ご飯はもう出来てるわ」

彼女の言葉に促され、ローテーブルに目を向ける指揮官。

テーブルにはカーシヤと呼ばれる粥。東洋の粥とは違い塩味ではなく、砂糖を入れ牛乳でご飯を煮た甘みのある粥。指揮官達のいる土地では、なじみ深い料理だ。

指揮官が目を擦りながらテーブルにつくと、AK—12は彼の隣に座る。仲睦まじいカップルがするように、さも当然と言わんばかりに。

AK—12がポットを手に取り、紅茶を二人のカップに注ぐ。湯気と共に空気に混じる紅茶の香りが、寝起きで鈍い指揮官の鼻腔を擦り、食欲を促す。目の前にある温かな朝食に、重たげだった目蓋が少しずつ持ち上がり、彼の意識が覚醒していく。

見るからに目の前の食事を心待ちにしている彼の態勢。彼の様子にAK—12は「ふっ」と一つ嬉しそうな声をあげる。

「食べましようか」

「だなあ」

彼女からの許可に指揮官は間延びした声で応じ、二人はスプーンを手に取る。

「いただきます」

「頂きます」

指揮官がカーシヤにスプーンを差し込み、一口分を口に含む。

舌はミルクと砂糖の甘味を全体で感じ取り、歯は柔わらかく煮込まれた白米を軽くすり潰す。微かに感じる芳醇な香りはハチミツのそれだろうか？クドさを感じない甘さが、寝起きで重い体にはちょうど良かった。

じっくりと静かに咀嚼して味を確める指揮官を、AK—12は薄らと目蓋を持ち上げ、特徴的な角膜を露わにして見つめる。普段は自信に溢れ、心配の色を滲ませることのない彼女だが、今ばかりは若干の心配を覚えてるようだ。

口に含んだカーシヤを指揮官は飲み込み、一言。

「美味しいな」

その一言を得られたAK—12は、目蓋に瞳を閉じ込めると、口端を持ち上げて笑みを作る。

「当然ね。あなたの好みに作ってあるのだから」

当然、と普段の自信溢れる彼女の言葉ではあるが、その言葉の中には安堵の感情が混じっている。そう若干回転が遅い思考回路でも感じ取れるくらいには、指揮官はAK—12の機微はわかっているつもりだ。

ティーカップのハンドルを掴み、湯気の立つ水面に息を吹きかけ軽く冷ます。唇を琥珀色の液体に軽くつけ温度を確認。飲める暖かさであると判断した指揮官は紅茶を

口に含む。

彼の紅茶には砂糖やミルクなどは入っていない。何も手を加えられていない茶葉本来の味わい。

指揮官の舌を紅茶が浸す。芳醇な香りと渋み、乾いた口内を潤し、温め、寝起きの身体に目覚めを促す。

「ふう……」

喉を通過した後は、ほどよい暖かさが全身に伝わっていく。指揮官が肩の力を落とし思わず一息ついてしまうのも仕方な無い事だろう。

「ふうっ」

たった一口じっくりと味わう指揮官。そんな彼の様子がおかしかったのか、AK-12はスプーンを持った手を口元にあて、声を漏して微笑みかける。

温かい食事と紅茶。目覚めを促す二つの要素によって、指揮官の意識は完全に覚醒する。頭はフル回転を始め、今日のスケジュールに、タスクの割り当て、カリーナに発注する資料、AK-12の興味追及をどうやって躲すかなど、今日一日を無事に過ごすの必要な情報を整理し始めたところで、一つの疑問が湧いた。

単純なことである。

「なあ」

「うん？」

指揮官からの呼びかけに小首を傾げて反応するAK-12。普段は見ることのないかわいらしい仕草。AN-94だったら声を押し殺して感極まるかも知れないが、疑問を解消することを優先している指揮官は気にしないふりをする。

疑問とは本当に単純なこと。

「なんで俺の部屋に居るんだ？」

AK-12が何故指揮官の私室にいるか？それも、誰も私室に訪れる筈の無い時間帯である朝に。

グリフィン基地にある電子ロックの全ては、情報戦特化のスペシャルモデルであるAK-12には歯が立たないことはよくわかっている。

なんせ、AK-12は何度も指揮官の部屋に侵入している。仕事から帰ったら、さも当然のように湯上がりのAK-12が出迎えた事なんて、両手の指の数以上にある。

が、彼女が侵入するとしたら、仕事終わり。今まで早朝の時間に侵入してきたことはない。

しかも、モーニングを作って指揮官の目覚めを待ち構えていたという。

食事によって頭の中がはつきりとしてきた指揮官だが、浮かび上がった大量の疑問符によって曇っていく。

感じて当然の指揮官の疑問。

「ふふっ」

彼の疑問にAK—12は眉と口を緩め、一段と穏やかな笑みを浮かべ、

「これのこと、忘れたの？」

左手の甲を掲げた。

一見すると、AK—12の白魚のような美しい指だけに目が行く。毎日戦地に赴き、武器を握っているというのに、彼女の手の美しさは変わらない。陶芸品のように滑らかで、惚れ惚れしてしまう。

が、一つだけ存在感を示すように光沢を放つ指が。それは、左手の薬指。窓から差し込む朝日を反射し、輝くものが嵌まっていく。

光に焼かれないように瞳を絞って正体を確かめる指揮官。

輝きの正体。それは——指輪だった。

「ああ……」

呆けたような声を出す指揮官。笑みを深くするAK—12。

「なるほどな……」

AK—12がここにいる理由を認めたように、うんうんと頷く指揮官。AK—12も同調するようにうんうんと頷く。

納得だろう。彼女が指輪を着けている。それだけで、彼女が朝指揮官の部屋にいる十分な理由になり得る。

指揮官は笑みを浮かべる。AK-12も微笑み返す。

「ははっ」

「ふふっ」

笑い合う二人。指揮官は唐突に立ち上がり、クローゼットへ向かい開け放つ。

クローゼットの中にあるのは、グリフィン支給の赤と黒を基調とした制服と、微かにある彼の私服。それだけでは無く、片隅には重厚な金庫があり、その上に手のひらサイズのコンパクトな藍色の箱が置かれていた。

金庫はテンキー式の電子ロックでは無く、アナログなダイヤル式。手間のかかるダイヤル式にしたのは、先程語った通り電子ロックはAK-12の支配下にあるからだ。

戦術人形はデジタルな方式には強いが、前世的なアナログ方式にはめっぽう弱い。その弱点を突く形で、AK-12対策も兼ねてダイヤル式にしたのだ。が、扉が半開きになっていることから、誰かがロックを解いたのは明白。

金庫の中には何が入っていたのか、なんとなく察する事だろう。手のひらサイズのコンパクトな藍色の箱、AK-12が掲げてみせた指輪。

そう、入っていたのは、戦術人形達が指揮官から贈られることを望んでやまない特別

な証、『誓約の指輪』。

箱を手に取り、中を開けてみる指揮官。案の定、封入されている筈の指輪は無い。では、どこにあるのか？わかりきったことだ。AK―12の指に嵌められているのだ。

リングケースを再び金庫の上に置くと、指揮官は笑顔を作る。AK―12も同じように笑みを返す。

「ははっ」

「ふふっ」

少しの間、笑声のセッションをした二人。

指揮官はAK―12に笑顔を浮かべたまま、右手を手刀の形にし。

微笑みをうかべたままAK―12の頭へと振り下ろす。

彼女の頭から鈍い音が奏でられた瞬間であった。

「はあ………全く」

「………上手く行かないモノね」

「当たり前だろ!!」

疲れたと言わんばかりに大きく息をつく指揮官と、悲しげに眉尻を下げるAK―1

2。

指揮官がAK-12が指輪を見せ着けたときに、彼女が私室にいる理由を理解したのは、簡単。

指揮官はそもそも誰とも誓約していない。

勿論、AK-12ともだ。

更に、AK-12は前科があった。指揮官が指輪を購入し金庫に納めた時、金庫のロックを解除し、勝手に指輪を嵌めたのだ。『よく似合ってるでしょう?』なんて、弾んだ声で指揮官に見せつけながら。

その時も同じように彼女の頭に手刀を食らわせたモノだ。ちなみにその時の金庫がテンキー式の電子ロックだ。金庫に入れとけば安全である、なんてことはこの基地にAK-12がいる限りありえないことをすっかり失念していたのだ。

それ以来、戦闘の報酬や、手伝いの報酬、色んなことにかこつけて指輪を要求してくる様になったのだが、のらりくらりと躲し続けていた。

そこでAK-12は考えた。『指揮官と誓約した後のような生活を演じることが出来れば、指揮官は雰囲気で誤魔化せるのではないか?』と。

思い立ったら即実行。そう言わんばかりに、AK-12は夜中に指揮官の部屋に侵入。人形達にとって天敵であるアナログ式ダイアルロックを長い時間掛けてなんとか

解除し、太陽が顔を出す前に朝食を作り、彼の寝顔を眺めて待ち構える良妻を演じていたわけだ。

残念ながら、『私達、とつくにそういう関係でしょ?』作戦は見事に失敗し、指輪は再び没収されてしまったのだが。

肩を怒らせ、怒りと呆れを飲み込むように勢いよくカーシヤを食べる指揮官と、すっかりと肩を落とし少しずつカーシヤを口に含むAK—12。

「どうやったたら誤魔化せるのかしらね」

「まずはその考えから直せっての」

困ったように息を吐くAK—12と、呆れたように大きく息をつく指揮官。何とも対照的な構図である。

暫し、無言で食を進めていた二人だが、指揮官からまた口を開いた。

「なあ、そんなに誓約したいのか?」

「さあ、どうかしらね」

「曖昧なのかよ……」

頬に手のひらを寄せ、大きく息をつく指揮官。まだ一日は始まったばかりだというのに、今日の指揮官はため息ばかりだ。

困ったように肩を寄せる指揮官のことを、薄らと瞼を持ち上げ横目で観察するAK—

12。疲れたようにこめかみを掻く彼をみて、また瞼を閉じると。

「ふ、ふっ」

何処となくご機嫌な声を漏す。

それが、AK-12の手のひらの上で言いようで気に入らない。

指揮官は彼女に一泡吹かせるため、

「あっ……」

唐突に彼女の身体を抱きしめた。

あまりにも突然なことに、情報の処理系統が一瞬おちてしまったらしい。AK-12は手に持っていたスプーンを落とし、スプーンと食器が甲高い音を奏でる。

耳障りな音。今の指揮官にとってそれは勝利のファンファーレのように聞こえて何処か心地よい。

腕の中に収まったAK-12。彼女の顔の温度が上昇しているのが不思議とよくわかる。

嫌がるそぶりを見せない彼女。自由になっていた手を少しの間空中に踊らせていたが、

「ん……」

手を置くポジションは彼の背中なのだとわかり、彼の背に手を添えた。

珍しく動転している彼女が、何とも愛らしい。普段は自信に溢れ、指揮官やAN―94を容赦なく振り回してくるくせに、意外な手を打たれると身を委ねるようになるのが、何ともかわいらしい。

AK―12に振り回されるようになってから何とも不思議な生活が続いた。

最初は、彼女の興味や無茶ぶりに振り回されてうんざりとしていたが、不思議と今はそんなことを思わなくなっている。

今は興味を突き詰めようとしてる彼女をみて、心の奥底が温まるような感覚を覚える。

彼女は本当に不思議な存在なのだ。

別に指揮官もAK―12も、お互いに面と向かつて好意を伝えたことは無い。それなのに、自然と深くわかり合え、身を委ね合うことに安心感を強く覚える。

AK―12のことをどう思っているかと聞かれたら指揮官はこう答えるだろう。

——あいつは、かけがえのないやつだよ

と。AK―12がいなくていいところ。もつとも、AK―12の事だから、ひっそりと聞いているかも知れないが。

指揮官が、指輪を勝手に嵌め誓約したのだとAK―12が言い張ることを許してない理由は唯一つ。

自分からAK—12へと指輪を渡したいから。自分の意思で、彼女へと。

そんな男心をAK—12は理解してくれる日が来るかは甚だ疑問ではあるが、実現できるとまでこのやりとりを続けるまでだろう。

指揮官がAK—12を抱きしめる力を強める。腕の中に彼女がいることを認めるように。

「不思議なやつ……」

その言葉を言う彼の語尾には、ひっそりと紛れ込んでいた愛おしさを示すかのように弾んでいる。

「ふっふっ」

彼の腕の中に収まるAK—12が嬉しそうに声をあげる。

AK—12は指揮官から伝わった愛おしさを返すような、心からの笑みを浮かべていたのだが、彼がその微笑みを真つ正面から見る事が出来るのは、もう少し先の話、かもしれない——